

佛心

二〇二二年四月号

浄土真宗 本願寺派

トロント仏教会



歡喜光

3月から当仏教会では、サンデーサービスをオンラインと平行して対面式でもお勤めすることが決まりました。まだまだコロナに対する油断は禁物であり、ご門徒方には本堂内でのマスク着用とソーシャルディスタンスの確保を必須としています。

それでもやはり皆さんと顔を合わせて仏事を行い念仏申すことが一番楽しくもあります。なにより法話をしているときにみなさんの顔が見えることが何よりも嬉しいです。

先月は、本願寺国際センター主催のフォーラムにパネリストとして参加しました。そのとき話したのは、コロナ禍で各寺院はどのようにして仏法をひろめてきたのか？そしてコロナ後どのようなように広めていくのか？という今までの対策と今度の展望でした。

そのディスカッションの中で他寺院の先生方と盛り上がったのは、「法話をするとときに相手の顔が見えないことが辛い」ということで

した。なぜなら、自分の伝えたいことがちゃんと相手に伝わっているのかは、相手の顔や反応を見ないと分かりにくいからです。

やはりカメラに向かって法話をするというのは、なかなか慣れるものではありませんでした。（そう思うとラジオパーやゴアノウンスを生業とする人たちの凄さを改めて感じました。）

さて、前回の佛心では阿弥陀如来の十二光のうちの一つである無碍光について書きました。本日は歡喜光についてお話しできたらと思います。

慈光はるかにかふらしめ

ひかりのいたるところには

法喜をうとぞのべたまふ

大安慰を帰命せよ

（註釈版聖典五五八頁）

この御和讃は、阿弥陀如来の光の一つである信心の喜びを与える光「歡喜光」を讃えたものです。

歡喜光とは、私たちが浄土へ生まれいくことを喜ぶ心が、私たち自身の力によっておこるのではなく、阿弥陀如来のおはたらきによっておこってくる光のことです。

この歡喜光には、瞋恚「いかり・腹立ち」という煩惱を対治するおはたらきがあります。この瞋恚の煩惱とは、自分の思うようにならないことに対してイライラし、物事を正しく見ることでできない煩惱です。

たとえかけがえのない愛しい我が子でも、親である自分の言う通りに動いてくれないければ誰でもイライラしてしまえます。「なぜ分かってくれないのか？」などの怒りにも似た感情がでてくることもあります。

なぜなら私たちは他人に助言するとき「あなたのために言っている」と信じて疑わないからです。しかし、それはとくとして「あなたのため」ではなく「じぶんのため」なのかもしれないと自覚することも大切なことです。

そうでなければ、自分の思い通りに動かない相手に怒りを感じ、知らず知らずのうちに自己中心的な考えや行動を取ってしまうおそれがあるからです。

私自身も大学生だったときに、あることで悩んでいる友達を気にかけては私なりの善意で声をかけていました。しか

し、彼から「大内君は（小さな親切、大きなお世話）」という言葉を知らないのかい？」と真つ直ぐな目で言われてしまいました。

それを言われたときは大変ショックでしたし、私の親切心を踏みにじられたようで怒りも感じました。しかし彼はさらに「善意や親切心は押し付けてくるものではない」と私のところを見抜いていたかのよう、に迫り打ちをかけてきました。（いま思うと、彼の相当の勇気がいったと思います。）

それから数日経って、仏教の講義を受けていると先ほどの「歓喜光」を耳にしました。友人と揉めてしばらく経った私のころは曇ったままでしたが、その講義はスツと頭の中に入ってきました。

そしてふと我にかえり、当時のことを思い出しました。そこで頭をよぎったのは、私自身が「私の善意」「私の親切心」に執着して、彼の悩みに本当の意味で寄り添っていたのかという疑問でした。しかも、そんな自分の我儘な姿すらも見えずに「あなたのために」と彼に押しかけていたと思うと、なんとも恥ずかしくおもえてきました。

それからまたしばらくして、その友人とばったり喫茶店で会いました。お互いこのまま避けるのも違うと思ったのか、なぜか同じ席に座りました。何を話すわけでもなく、少し気まずい雰囲気のままコーヒを

飲んでいました。しかし、いつの間にか二人して近くの稲荷大社へ向かい、その境内で発泡酒の缶を開けて仲直りをしていました。（当時はあまり言葉を交わさずとも仲直りが今よりも上手くできていた気がします。）

彼自身も言い過ぎたと思うところがあつたようで、私自身も彼のことを本当の意味で理解していなかったと反省がありました。

さて、歓喜光とは、浄土に往生することのよろこびを与えるだけの光ではありません。瞋恚のこころを対治するおはたらきがあり、物事を明らかに見させる光でもあります。つまりは、自分の身勝手な醜い愚かな姿を自覚させ、内省させるおはたらきがそなわっているのが阿弥陀如来の歓喜光です。

また、ここでもう一つ忘れてはならないことがあります。それは、怒りの炎を燃やしている自分を省みることができるのは、如来より賜った信心であつたからです。言い換えれば、すでに阿弥陀如来の光が私の中にはたらいて下さっていたということなのです。

そのおはたらきは南無阿弥陀仏の六字の番号となり、不可思議にも私のこのくちからこぼれ出てくれます。それは確かに如来のおはたらきが私にまで届いている証とも言えます。合掌

トロント仏教会 駐在開教使

大内祐真

【質問十一】 仏教徒ですが、つい占いを信じてしまいます。いけないことですか？（20代女性）

占いをちよつとした生活のアクセントにしている人は多いのではないのでしょうか。現代のように、生きるうえで選択肢と情報が増えつづけ、常に自己決定を求められる社会では、占いが必要とされるのも当然なのかもしれません。

占いは「この世界には何か隠された秩序がある」ということを前提にしています。そしてその前提によって、生の営みに意味付けする装置です。だから（広義での）宗教行為の範疇に入ります。私たちの生と死に意味づけをすることは、宗教がもつ大きな機能のひとつだからです。

ゆえに、占いはさまざまな宗教体系とも密接な関係にあります。仏教でも、チベットやブータンなどでは、さかんに僧侶が占いを行うようです。

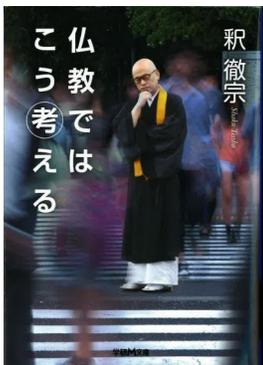
日本では、ピュアでシンプルな仏教を目指した鎌倉仏教あたりが呪術やト占などと袂を分かつ傾向を顕著にします。また近代以降、宗教哲学のプロテスタンティズムの影響などもあつて、伝統仏教団においてはその傾向が強まります。ご質問者の「つい占いを信じちゃうなあ。仏教徒としていけないことじゃないのかなあ」という危惧には、このような背景があると思われまふ。

考えてみれば、仏教は、現在ただ今の「私の思考や行為がどのような関係を生じるのか」という視点を大事にする宗教です。ですから、占いのように、生年月日や身体の相や血液型など固定的で大きなくりを根拠に物語を語る姿勢とは相容れないところがあります。安易な物語にすぎるのはやめよう！という仏教は説きます。

ということ、で、「占いを真実ことは仏教徒としていけないことか」というのですが、一度ご自身を「なぜ私はつい占いを信じてしまうのだろう」「私にとつて占いは自我を肥大させる方向にあるや否や」という視点で点検してみることをお勧めして、応答に代えたいと思います。

占いを信じるが良い悪い、ということではなく、まずはそこから始めることが、仏教の手順なのです。

釈徹宗 「仏教ではこう考える」 pg.32



【質問四十七】 小生、織田信長のファンです。浄土真宗では、一向宗を破滅させた信長に対して今も反感はありますか？（46歳男性）

いやいや、まさか！今なお「仏敵信長」「石山本願寺を返せ」などと怨む真宗者がいるとはとても思えません。（でも、ひよつとしたら、ひとりやふたりはいるかもしれないけど・・・）

少しご説明します。織田信長勢力と本願寺勢力は1570年から足かけ11年にわたつて戦いました。おもな戦いとして、伊勢長島、越前、近江、大阪での一揆を挙げることできます。なかでも、石山本願寺を中心とした合戦は有名です。

現在、大阪城となつて居る場所には、石山本願寺がありました。もともと第8代門主・蓮如の隠居所であつたのが、地勢的要地だったために石山本願寺として発展したんですね。畿内制圧を目指す信長は、本願寺勢力の立ち退きを要求。これに対して、当時の門主である顕如が自ら中心となつて戦つたというわけです。

これら一連の戦争がもつ意味は、なかなか重要ですよ。なにしろ宗教がもつバインド力の強さを世に知らしめた出来事ですから。

頼山陽が「何ぞ凶らん右府（信長のこと）千軍力。抜き難し南無六字（南無阿弥陀仏のこと）の城」と表現したほどです。本願寺教団との戦いによつてクローズアップされた「宗教勢力をいかにコントロールするか」というテーマは、その後の政府の宗教政策を方向づけることとなります。この合戦の流れに沿つて、各地の本願寺勢力の拠点は解体されました。さらにはクリシタン政策へも大きな影響を与えます。また、本願寺が東西に分裂することになったのも石山合戦が原因です。

こうしてみると、日本史上特筆すべき事件だったといえそうです。でも、宗教というものは政治や軍事で叩いてもなくなつたりしないんですよ。石山本願寺なき後も、大阪の中心部は寺内町として発展します。

庶民の信心はなかなかしぶといんですね。とくに歴史に鍛えられてきた伝統教団は、良い意味でも悪い意味でも、したたかな二枚腰をもつています。だから、いつまでも過去の合戦を怨んだりすることはないようです。

釈徹宗 「仏教ではこう考える」 pg.106

「日本語法座」

祥月法要 4月3日(日曜日)

時間：午後1時～ (日本語)

祥月法要とは、祥月命日（故人が往生された月のご命日）をご縁として仏法に遇い、阿弥陀さまの恩徳に報謝する思いでお勤めする法要です。



灌仏会（花まつり）4月17日(日曜日)

時間：午後11時～ (英語・日本語)

(シアトル別院より御講師をお招きするため両ヶ国語で行います)

かんぶつえ

灌仏会（花まつり）

日時：2022年4月17日(日曜日) 午前11時(英語と日本語)

トロント仏教会では今年17日(第三日曜日)の11時より灌仏会（花まつり）の法要を勤修します。今年はシアトル別院より御講師として楠輪番をお招きします。お釈迦様の生涯に思いを寄せ、一緒に聴聞しましょう。

灌仏会（かんぶつえ）は、釈迦の誕生を祝う仏教行事です。花まつり（はなまつり）と呼ばれ、親しまれている法要の一つです。この他にも降誕会（ごうたんえ）、仏生会（ぶっしょうえ）、龍華会（りゅうげえ）などの別名もあります。



※シアトル別院より御講師をお招きするため、
英語と日本語の両ヶ国で行います。